

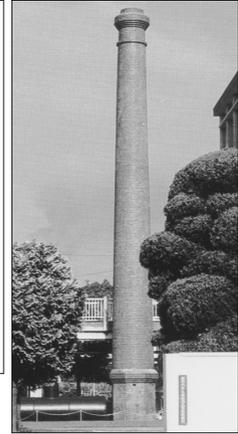
特色ある学校

学校活性化への取り組み

—地域の教育力の活用—

鹿児島県立鹿児島工業高等学校
校長 今村 忠

本校のシンボル「大煙突」
写真の大煙突は、大正9年に造られ、以来80余年の星霜の中、2万7千余名の卒業生の青春の日々をみつめてきた。当時学校周辺は水田で、遠くからでもその威容が眺められた。開校時から残る唯一の施設として同窓生の心よりどころとなっている。また、その勇姿は我々に「鹿工のあるべき姿」を問いかけている。



1. はじめに

本校は、明治41年に鹿児島郡立工業徒弟学校として開校し、以来95年の間、幾多の変遷を重ねながらも、本県の工業教育の中心校としての役割を担ってきた。昨年4月に着任して以来、この学校をさらに活性化させることが、県下の工業高校の活性化にもつながるといふ思いから、「地域のもつ人的・物的教育資源を最大限に活用しよう」という考えの元に、さまざまな取り組みを推進してきた。本稿ではその取り組みの一端を紹介したい。

2. 本校の概況

平成3年度から、当時全国で初めてと言われた「類・系」というシステムを導入し、現在に至っている。1年入学時は、Ⅰ類（6クラス）、Ⅱ類（3クラス）でくり募集し、2年進級時に1年間の進路学習を元に、下記のような系を選択してそれぞれの専門の知識・技術を勉強するという仕組みである。

Ⅰ類—電子機械、電気技術、情報技術、工業化学

Ⅱ類—建築技術、建設技術、インテリア
当時、学科の枠を越えて全職員が繰り返し

会合を重ね、この前例のないシステムをどう作り上げ、生徒のためにどう活かすかを話し合った。そのような教師集団の真剣な姿が生徒の変容をもたらし、また、学科のセクト意識も次第に薄まり、学校は、地域の信頼を得て見違えるように甦ってきた。しかし、類・系システム導入から10余年が経過し、当時の職員も全員が入れ替わり、システムのもつ長所が生徒のために真に活かされているかという点においても、教育活動全般においても、少なからずマンネリ化の傾向が目についたのも事実である。

3. 活性化への取り組み

そのような状況に鑑み、昨年度、職員10名からなる学校活性化委員会を設置して、活性化の方策を検討することにした。類・系システムの共通理解を図りながら、目標を明確化するため「ものづくり教育の推進」「資格取得への取り組み」「進路の夢実現」という三つを提示し、その具体化に向けて取り組んでいるところである。これらの目標を具現化するには、地域のもつ教育力を学校の中に取り入れ、「生徒に鹿工生としての誇りと自覚を促す」ことが肝要であると考え、次のような



東京オリンピック時の聖火ランナー(生徒会長)の講話
ことを実践してきた。

(1) 先輩の講話

本校は、2万7千余の卒業生を世に送り出しており、先輩方は地元鹿児島でも行政・経済を支える大きな柱となって活躍されている。

各支部の同窓会に出席して多くの先輩方に接し、その人生観や今まで歩いてこられた道程、各分野のスペシャリストとしての心構えなどに深い感銘を受けた。このような先輩の持つ教育力を、ぜひ生徒のために生かしたいという思いから、後輩への講話をお願いすることになった。

実施の形態は、学校全体、学年ごと、専門の系ごと、さらには1年の『総合的な学習の時間』にとさまざまであるが、お願いした方々全員が二つ返事で快くお引き受けくださり、心から感謝している。昨年度は、延べ21回実施した。

中には、自主的に原稿を作成して持ってこられる方もおられ、先輩方の母校愛には心から敬服させられる。講演会の開催に当たっては、担当教諭が、人選→予備折衝→依頼文作成・発送→当日の出迎え・打ち合せ→生徒の指導→感想文用紙の用意→会場作り・進行→質問の用意→講話概要のまとめ→生徒の感想文→お礼状送付等という一連の作業を行う。

多くの教師にとって、今まで体験したこと

のないこのような活動が、教師の心をも開かせる大きな力となっている。また、生徒の感想にも、先輩の人生体験からにじみ出る言葉は、心の奥深くストレートに届いていることが伺われ、鹿工生としての自覚を促す力として作用しているように思われる。

また、先輩方には、母校のありのままの姿を見てもらう機会にもなり、貴重な感想や意見を伺い、校長としても教えられることが多く、大変有り難く思っている。

(2) ものづくり研修会

昨年度、県教育委員会から「ものづくり学習振興支援事業」の推進校の指定を受けた。

工業高校の特長は、なんといっても“ものづくり”にある。現在の実習形態や教師の研修の在り方等を見直さなければいけないと思っていた矢先に、この事業の推進校となったわけで、校内にその推進委員会を組織し、積極的に取り組んできた。

○校内推進委員会

各専門系の教師7名と教頭が中心となり、取り組みの企画・運営に当たってきた。

“高校生ものづくりコンテスト”への取り組みも課題となっていただけに、この事業を最大限、教師と生徒のために活かそうと、委員全員が前向きな姿勢で臨み、学校活性化のエンジンの役割を担ってきた。

○ものづくりのスペシャリスト発掘

“ものづくり”への取り組みの意識を校内に高めるには、いろいろな分野のスペシャリストを発掘し、その人材を活用することが効果的であると考え、人材データベースづくりから始めた。推進委員の教師が、同窓会や職業能力開発協会等、関係団体とも連携しながら人材発掘に努め、30余名のリストができた。



木材加工の研修—講師は技能オリンピック金賞受賞者

○スペシャリストを講師にした教員研修会

発掘した人材全てを学校のものづくり教育に生かすため、年度内に最低1回は講師に依頼し、教師の研修会を開催することにした。

ある時は校内の教師を対象とした研修会であったり、またある時は、県下の工業高校の教師にも参加を呼びかけて行うなど、自校のみならず県内全ての工業高校活性化のために活かそうと努めた。一例を挙げると、技能オリンピックの家具製作部門で、全国一の栄冠を勝ち得た方を講師に迎えた時は、参加した教師の眼が生き生きと輝き、取材にきた新聞記者に「若干23歳の講師の話や作業を先生方があのように真剣に見入る姿が不思議でならない」と言わしめる程であった。講師は、こ



県大会開会式の様子

のような若い人から、民間の熟練者、大学の先生、さらには、工業高校を卒業して今は化学分析のプロとなった女性講師など多士多彩で、その匠の技が、教師の技術・技能向上の意識を開眼させてくれたように思われる。

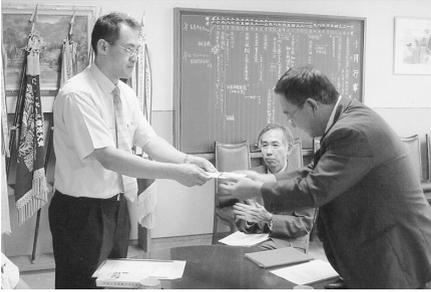
このような取り組みの積み重ねの中から、次第に教師のものづくり教育推進の意欲も高まり、高校生ものづくりコンテスト県大会の開催へと発展していった。

○ものづくりコンテスト県大会の開催

全国工業高等学校長協会が主催する、ものづくりコンテストへの取り組みは、本校のみならず、鹿児島県の工業高校の大きな課題であったが、スペシャリストを講師にした研修会の成果が各工業高校で生徒へ還元され、全県的に意識も高まる中、県大会実行委員を組織し、平成15年6月19日開催にこぎつけた。

審査委員には、人材データベースに登録された各界のスペシャリストや大学教授など16名をお願いした。審査が終わった後、特別に講義をしていただいたり、専門的なことを指導・助言していただく時間も設け、生徒のみならず、引率の教師にも大変意義ある勉強の機会となった。この県大会が契機となり、その後、二人の大学教授に本校生徒に講義をしていただくなど、高・大連携ができたのも大きな収穫であった。この大会の様子は、新聞、テレビなどマスコミ各社により大きく報道され、工業高校の存在をつよくアピールできた。

さらに、ものづくりに係る新聞記事をみて、『ものづくり育英会』というNPO法人から工業高校の取り組みを支援したいとの申し入れもあ



NPO法人「ものづくり育英会」からの援助も

り、生徒・教師にとって大きな励みになっている。

その後、「小学校親子ものづくり教室」や中学生を招いての「ものづくり体験実習」、「中学校技術家庭科教師の研修会」の開催など、学校の外と連携した取り組みが、教師自らの手によって創り出されている。これらもまた、地域の匠の技の力が源となって実現したものにほかならない。

○工業系教師の匠の技の継承

日本の経済成長に伴い昭和40年前後は工業高校の急増期で、本県でも、工業系専門教師の多数の採用が続いた時期でもあった。それから30余年を経過した今、高い技術・技能を身に付けた個性的な教師の定年退職が相次



匠の技の継承—教師のスターリングエンジン自主研修会

ぎ、教師間の技術の継承が危ぶまれている。「優れた技術・技能を持つ定年で勇退された匠の元教師の存在もまた地域の大きな教育力である」という思いから、本年度は、私自身が若い時から、その高い学識と技術を心から尊敬してきた先輩教師を、初任者研修の指導教員として迎え入れることができた。

初任者への的確な指導・助言は言うに及ばず、校内・外の教師を対象とした、スターリングエンジン製作の自主研修会開催をはじめ、生徒の『課題研究』や後輩教師への技術指導など、ものづくり教育の推進に八面六臂の活躍をされており、本校活性化の大きな推進力となっていたいただいている。

その様子を見て、工業高校の更なる発展のためには、こうした先輩教師の匠の技が後輩教師に継承されていくことは非常に大切なことである、という思いを一層強くしている。

4. おわりに

地域の教育力を活用した学校活性化への取り組みということについて、主に先輩の講話、ものづくりへの取り組み等について述べてきたが、学校評議員会、インターンシップ、学校の伝統行事などもまた、学校の外との連携を重視した取り組みで成果を挙げている。

本校は、5年後に創立100周年という記念すべき節目の年を迎える。「現状維持は衰退を招く」と先人から教えられてきた。今後も、地域のもつ教育力をいろいろな形で取り入れながら、県下の工業教育の中心校にふさわしい学校づくりに努めていきたい。